

私には二人の子供がいる。上が息子で下が娘の一男一女だ。しかし下の娘には生まれつきの発達障害があり、言葉というものを発することが出来ない。それが解った時、私はひどくショックを受け、落ちこんだ。「どうしてうちの子が。普通の子であれば、それで十分なのに。」しばらくショックは消えなかった。しかしいつまでも落ちこんではいけない。これからは親として精一杯出来ることをしよう、そして暖かく見守ってやろうと決心する。そう思っていたある日の出来事だった。障害のある娘には、もちろん全てにおいて判断能力もない。娘はゲタ箱の中にあったくつずみを口にくわえ、それを食べようとしている。それを発見した私はあわてて洗面所に連れて行き、必死で洗ってやった。そして洗いながら娘を叱った。するとその時、息子が近づいてくる。「お父さん、そんなに怒らないでやって。かわいそうだから。」

私の腕をつかみながら、必死でそう訴える息子の目には涙が光っていた。まだ二人とも保育園児である。その時、私の胸には熱いものがこみあげてきた。息子に何か言ってやりたかったが、言葉が出てこない。しかし私は感動した。まだ幼い息子が妹を思いやる優しい心をいつしか育てていたのだと。私は息子の息子なりの成長が親として嬉しかった。そして家族が力を合わせ、こうして暖かく見守ってやるのが、娘にとっての幸せになるのだろう。そう思ってその後の日々を過ごしてきた。そんな息子や娘も、今となっては二人とも高校生である。私の期待通り、息子はとても素直で優しい子に育ってくれた。これは妹に障害があることと無関係ではないと思っている。あの日の出来事がそう確信させてくれた。娘は今でも言葉は発せない。しかしとても元気に育ち、いつも笑顔を絶やさずにいてくれる。それも家族の愛情と無関係ではないのだろう。そんな二人の子供と一緒に、私は今とても幸せに暮らしている。